

2003年に起きた諏訪湖の御神渡りについて

石黒直子

1. はじめに

2003年1月19日、諏訪湖では御神渡り（氷上の鞍状隆起現象とそれに伴う神事）の出現が5年ぶりに公式に認められた。筆者は幸運にもその時期諏訪に滞在しており、御神渡りができるまでの経過を調査し、八剣神社による拝観の儀式にも参加することができたので、それらについて簡単に報告したい。

諏訪湖の御神渡りは近年、出現頻度が減少している（三上・石黒1998）。1990年以降では1991年、1998年、2003年の3年のみである。これは、気候の温暖化、諏訪の都市化による影響等が想定されるが、御神渡りの定義自体が過去とは異なっていることも忘れてはならない。御神渡りは諏訪大社上社の男神が対岸の下社の女神に会うために湖氷上を横断した跡であると言われていることから、御神渡り自体が湖を途切れずに横断している必要があるだろう。しかし15～17世紀には御神渡りは単なる氷に入った亀裂として定義されていた可

能性が高く、ある程度の氷の隆起が必要とされる現在の御神渡りよりも認定条件が緩かったと考えられる（石黒2001, Ishiguro *et al.* 2002.）。

2. 2003年の御神渡りの経緯

2003年1月6日から9日にかけて連日最低気温がマイナス10度以下の日が続き、その後いったん気温は上昇するものの、10日間以上に亘って気温の日較差が7度以上となる日が続いた（図1）。気温の日較差が大きいことは、気温が低いこととともに御神渡りの成長にとって重要な条件である（東海林1992）。

八剣神社による御神渡りの公認には前述の通り亀裂の横断と氷の隆起が必要となるが、写真1で見られる程度の、遠景からでもはっきり確認できる氷の亀裂は、筆者によりすでに1月11日には確認できていた（写真1）。また、同地点から観測した2日前の湖には隆起は認められなかったので、遠方からでも確認できる隆起がわずか2日の間に形成されたことになる。

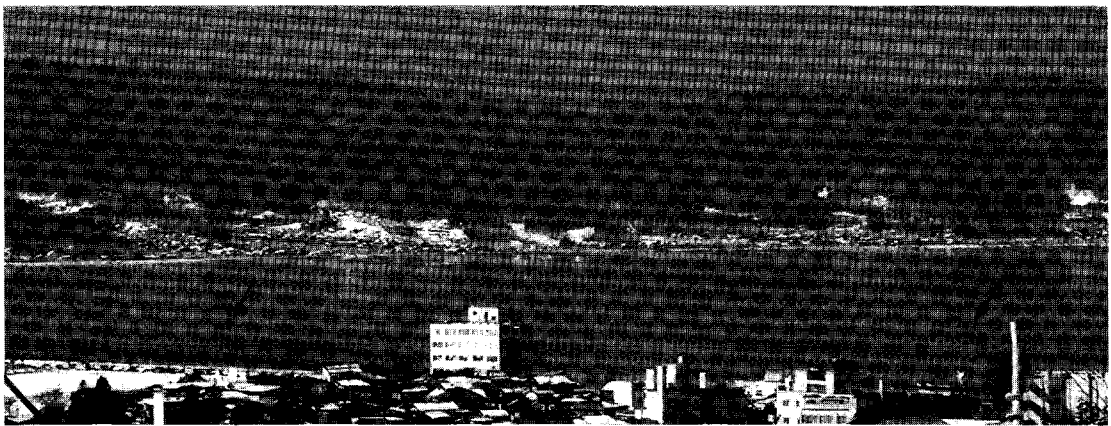


写真1 筆者が確認した非公式の御神渡りの出現

2003年1月11日茶臼山地区より初島方向へ著者撮影。中央にある建物の屋上から右下の煙突先端にかけて亀裂が白く線状に見える。

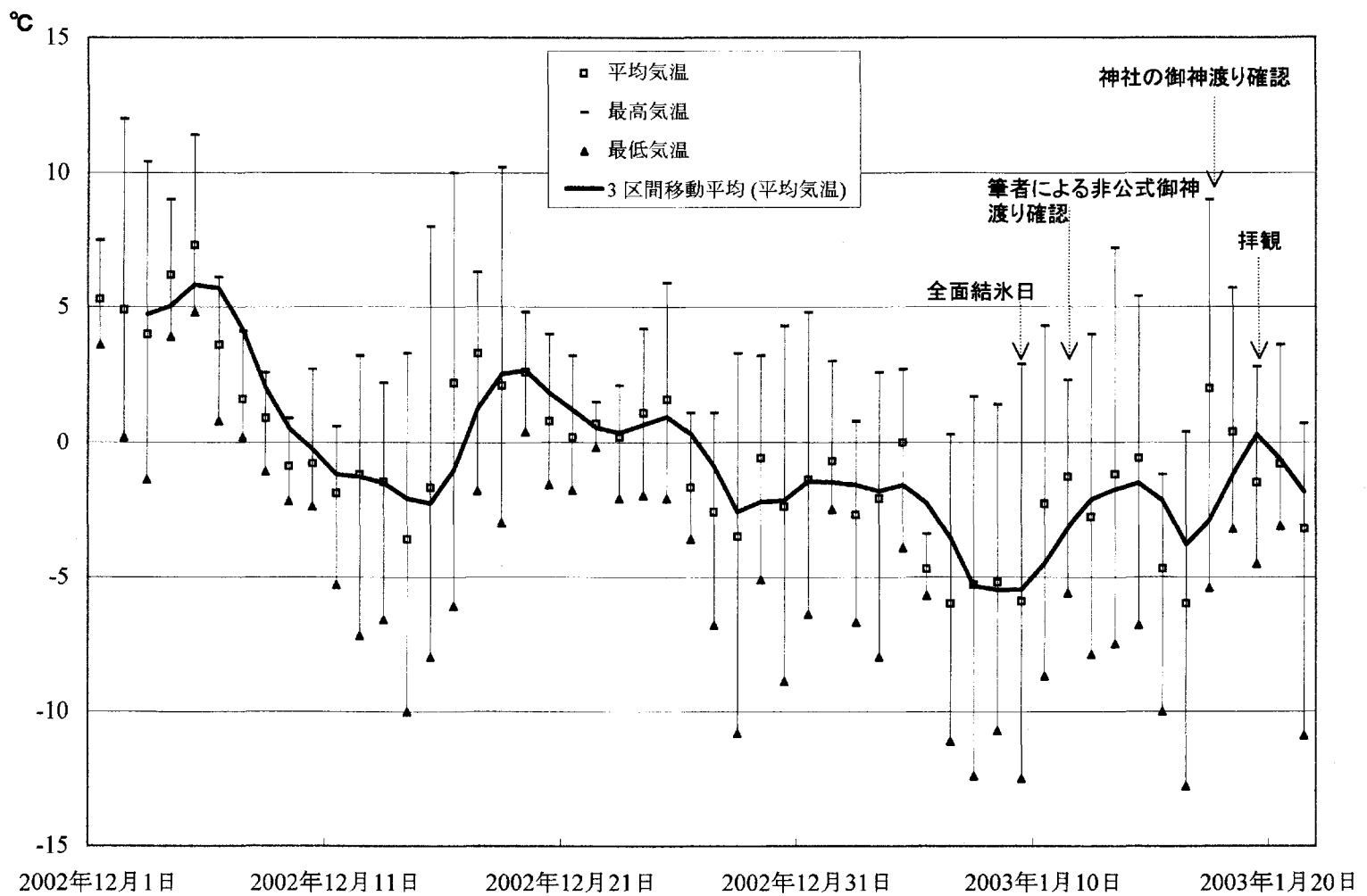


図1 2003年冬季の気温の推移 (気象庁 AMeDAS データより作成)

1月17日に御神渡りが八剣神社によって公認され、19日に拝観が行われた。八剣神社は諏訪大社の分社で、古くは諏訪湖の漁師が住む区域で、昔から諏訪湖の御神渡りに関する観測を委任されてきた(石黒 1996)。通常御神渡り確認から拝観までは3日間の精進潔斎と呼ばれるお清めの期間が設けられるが、最近では拝観日を土日祝日にあわせて行う慣例になっている(石黒 2001)。拝観日当日は早朝に八剣神社の宮司や氏子総代をはじめ関係者が神社でお清めをした後、複数走った亀裂の方向を確かめるために湖を一周し拝観を行っ



写真2 拝観の場面

2003年1月19日船渡川沖で著者撮影。

た。しかし、数十人にのぼる神社関係者以外にも、マスコミ関係者や一般人など相当な人数が氷上の一箇所に集中していた。特に氷が割れている御神渡り付近に人が密集することは大変危険なことである。氷上調査に多少の経験がある者にとっては常識だが、そのような知識のない観光客にどう対応していくかは、今後の拝観式の課題となるだろう。ちなみにヨットハーバー沖で拝観時に測定した氷の厚さは約10cmで、同日午後には氷は割れて開水面になっていた。

八剣神社によって確認された御神渡りは全部で3本あり(図2)、それらの始点と終点で亀裂の方向を確認しお払いをした(写真2)。湖を一周した後再び八剣神社に戻り、御神渡りの方向を報告した後、過去の記録と照らし合わせて類似した事例(1978, 1998年)を検索した。今年の世情は「作物は平年並み、経済と政治は不安定、天候は不順で水が心配」と予想された。この後、来たる3月2日に奉告祭が行われ諏訪大社上社に報告された後、上社は宮内庁と気象庁へ御神渡りの記録を送ることになる(石黒 1996)。

3. 今回の観測により得られた結論

物理的な鞍状隆起現象の出現と神社によって公

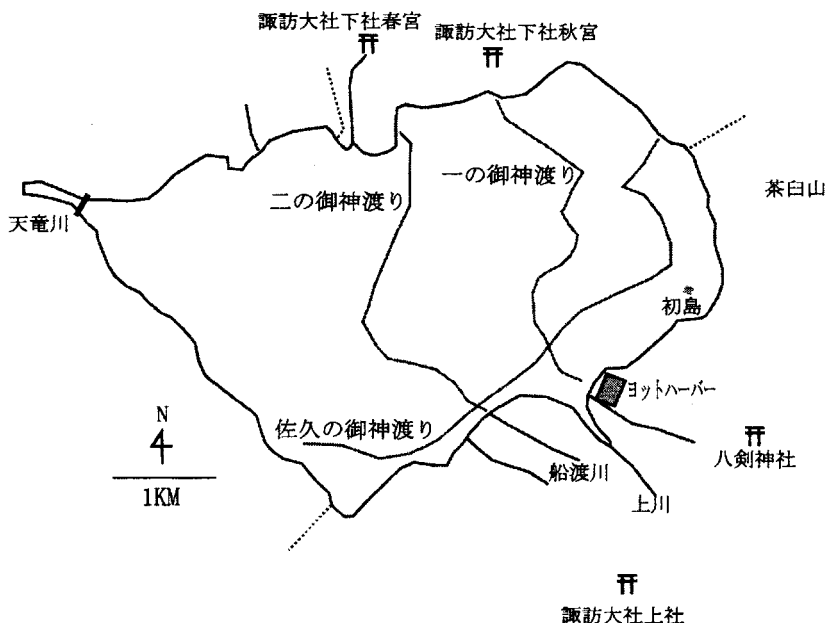


図2 2003年に起きた3本の御神渡りの走向図

認められる御神渡り日との間に数日のずれがあることが今回の観測によっても確認された。また今年の場合、全面結氷が起こってから遠方から確認できる程度の隆起の形成まで2日、神社が公認する御神渡りまでは8日を要した。今年の拝観日を決定する経緯から、御神渡り日から拝観日までの日数には江戸時代と現在とでは違いがあることが推定される。江戸時代には6日間程度の齋戒が通例であった。(荒川1954, 石黒2001)さらに、今年の全面結氷日とその前の気温の推移について検討したところ、結氷日前3日間に互って最低気温が-10度を下回る日が続いた。これは、石黒(1996)で20世紀を通して結氷日と気象データの関係を考察した際に得られた結論、すなわち、結氷の発生は結氷日前3日間の最低気温が低いことと相関が高いということと一致する結果となった。

4. まとめ

御神渡りにまつわる行事の一連の流れは、次のようになっている。①全面結氷、②氷上の亀裂が湖を横断、③鞍状隆起現象発生、④八剣神社が③の現象を御神渡りとして認定、⑤御神渡りを祝う拝観の儀式、⑥諏訪大社などへの報告。

長年の御神渡りの記録を気候資料として用いる場合、物理現象である①、②、③の発生日の年々変動をその指標としたいところだが、古文書に記録として残っているもののうち、少なくとも100年以上の期間(たとえば初期の御渡り帳: 1683~1871年)は、④御神渡り認定日や、⑤拝観日の記録のみである。このため、①、②、③から④や⑤までの日数の把握が重要となる。

1950年~80年代にかけては諏訪測候所の職員によりこれらの現象の“気象データとしての”観測が詳細に行われたが(米山1988)、1997年からの諏訪測候所の無人化に伴い現在そのような観測は行われていない(三上・石黒1998)。今年の観測結果から、昔と現在とではそれぞれの現象を認定する条件が違うことが示唆された。そしてこのことは、550年間に互るデータベースを元に御神渡り発生日の年々変動を気温の年々変動に読み替える際に注意が必要であることを意味する。

今後はこのような詳細な現地観測データをさらに蓄積するとともに諏訪測候所による観測データ、さらに神社による古文書とを比較検討し、時代ご

との観測方法に基づいた期日決定の特性を明らかにすることが課題になる。それにより、この550年以上にわたるデータを均質性を伴った気温の年々変動に読み替えることが可能になるであろう。

謝辞

調査に当たっては八剣神社宮司の宮坂清氏、国立環境研究所の田中博春氏、著者の祖父母にあたる牛山丈夫・あさ子両氏(諏訪市在住)に便宜を図っていただいた。北海道教育大学釧路分校の東海林明雄教授(雪氷物理学)には研究上のアドバイスをいただいた。

注

1) 県、警察、釣り舟業者、漁業関係者、諏訪湖周辺市町などで行く諏訪地区観光客安全対策推進会議は諏訪湖結氷安全対策会議を開き、御神渡り見物や穴釣りに訪れる観光客への氷上への前面立ち入り禁止を呼びかけるなどの働きかけをできる限り行っている。しかしながら、法的強制力を持たないために効果はあまり出ていないのが現状である。

参考文献

- 荒川秀俊(1954)5世紀に亘る諏訪湖御神渡の研究。地学雑誌63(4):1-8。
石黒直子(1996)諏訪湖の御神渡りと気象データの関係について。お茶の水女子大学卒業論文。113p。
石黒直子(2001)諏訪湖の御神渡り記録の気候復元資料としての均質性。地理学評論, 74巻7号, p415-423。
三上岳彦・石黒直子(1998)諏訪湖結氷記録からみた過去550年間の気候変動。気象研究ノート, 191号, 73-83。
東海林明雄(1992)「氷の世界」あかね書房。
米山啓一(1988)「諏訪湖の御神渡り」建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所。
Ishiguro, N., Kajiwaru, M., Fujita, T. Akiba, Y. and Touchart, L. (2002) Heterogeneity of the Omiwatari records of Lake Suwa as the database for winter temperature estimation. *Verh. Internat. Verein. Limnol.* 28.1107-1110. Stuttgart, July 2002.

いしぐろ なおこ
リモージュ大学大学院(フランス)